

## 中世武州御岳山の勧進活動——「五部大乘経」出版の場合

白石 克

### 一、はじめに

南北朝・室町期刊本「五部大乘経」といえば、立川普濟寺版をその代表として掲げることができる。この出版事業に当り、武州御岳山の別当世尊寺歴代住持四人が多摩地方だけでなく、遠くは近江や遠江まで助縁を募って勧進して廻っていた。武州御岳山は、吉野金峰山から蔵王権現を勧請した社で、関東における修験の中心地でもあった。近世には江戸町人を中心とする御岳講が作られ、御岳詣でが盛んとなり、山頂や麓には御師の家が並んでいた。現在も、標高約九百メートルの山頂地域には、御師の集落が作られている。他の古社と同じように、明治の廃仏棄釈による焼失史料も多く、中世以前の山内の様子はほとんどわからない。刊行願主四人のいた世尊寺は、天明八年（一七八八）に廃寺になっている。

『華嚴経』卷一末刊記に「同願主比丘 光信 祖栄誌之ノ貞治二癸卯八月六日始之、」『大方等大乘経』卷一末

に「心安甲寅七年十一月日 化主比丘光信」、同「日藏經」卷一末に「貞治丙午五年五月 日 願主比丘光信 同願比丘如見」、同「月藏經」卷一末に「心安戊申元年九月十一日始 願主比丘光信 同願比丘光用」、同「摩訶般若經」卷一末に「嘉慶一 九月日化主比丘光信」のように、各經の卷末には刊記のあるものが多く、そこには刊行年と願主が記されている。刊記に見える各願主は「世尊寺歴代表」に記された、四世「祖栄（貞治三・七・二一）・六世「如見（心安三・五・七）」・七世「光用（至徳三・十二・二）」・八世「光信（応永七・三・二八）」である。また、出版事業に助縁して喜捨した人々の名が、各巻の柱（版心）に「伊名村住子金井信女紫金助之（華嚴經 卷五八第八張）」や「比丘是雲 比丘尼希賢 女契普 道珍（同卷 第二張）」のように記されている。前者は一人で版木一枚分、後者は四人で寄進したと考えてもよいかと思われる。

版木は一枚三十六行、各行は十七字に構成されている。版木を作る経費を大まかに考えてみた。金沢文庫保管（金沢称名寺所蔵）の『華嚴随疏演義抄』（正慶一—三三三—刊）中に、紙背に「刊賃」（恐らく版木の刻工に支払った代金）の書かれたものがある。これらは現在の校正刷りに似ている。この刊経は以前、奈良東大寺版と呼ばれていたが、同経を当時から所蔵している称名寺にて、出版されたことも考えられる。或いは近距離の金沢も含めて、鎌倉地方の出版物とみた方がよいかと思われる。同書は一版木が四十行・各行二十二字でできているが、同書の底本は高麗版、本書普濟寺版は宋版（詳細は後述）に拠っているので、外国書の日本版という意味で、共通するところがある。行格こそ異なるが、両者とも関東の出版で、しかも、ほぼ同じ時代（正確にいうと、普濟寺版は三十年後）の刊本であるので、同書の刊賃から類推することができると思われる。同書の紙背識語に刊賃 一貫六十六文／華嚴抄 一之下／演義抄 一之下一板 上之四郎／正慶元年十一十五（卷一下第一板）、刊

質 一貫五十九文 華嚴抄 一之下之六板 上之四郎／正慶元九十九（卷一下第六板）、刊質五十五文／華嚴抄  
一之下 十一板 上之四郎／正慶元十一十五（卷一下第十一板）、刊質 一貫五十五文／演義抄 三上一板 上  
之四郎／正慶元二四廿五（第三上第一板）が書かれている。この内、「上之四郎」は、普濟寺版にて行間に名前  
の記されるような刻工（彫工）と思われる。この記載から、一板木について、ほぼ一貫五十文余り支払っていた  
ことがわかる。普濟寺版経巻の各巻はほぼ二十版（張）程ある。一巻は二一貫文程になるので、『華嚴經（全六十  
巻）』は約千二百版木、千二百六十貫文かかる。同様に、「五部大乘經」全体（現存しないものも含む）を大まか  
に計算すると、全約三千八百板木、銭約四千貫文程になる。仮に、銭一千元（一貫文）を米一石として換算する  
と、「五部大乘經」を刊行するには、版木を彫る刻工たちに米四千石を支払わなければならないことになる。その  
他の諸経費を合わせると、銭で五千貫文、米に直すと五千石程になると思われる。昔と現代では物価の諸条件が  
異なるので、無理なことではあるが、現在の物価に換算してみた。米一〇キログラムを四千元として計算すると、  
一石が約六万円、五千石では三億円になる。現金収入が極めて低く、また米の生産量も低い時代であるので、実  
際にはこの数倍の価値になったと思われる。従って、この三億円は大まかな基準に過ぎない。刊行願主たちは、  
銭五千貫を集めるために、御岳山を下山して、勸進行脚して廻っていたわけである。

願主の内でも、世尊寺四世祖栄や六世如見は刊行のための寄進をしている。「比丘祖栄」（『日蔵經 貞治六刊』  
卷六第十二張）、「志為茂林祖栄上人捨之」（『月蔵經 応安五刊』卷十 第十四張）、「比丘如見 為父四方田道氏  
貞綱法名正綱捨之」（『月蔵經』卷十第十二張）の各刻記がある。前者の祖栄は、五年後の『月蔵經』卷十になる  
と被供養者に変わっている。後者の如見は刻記によって、助縁者であることだけでなく、彼が四方田道氏の息子

であることもわかる。版木を彫った刻工名は「工師源盛彫之（『華嚴經』巻四）」のように、本文の行間に刻されていることが多い。

以下は現存する普濟寺版の「五部大乘經」の詳細である。

『華嚴經』六十卷（貞治二―三六三）応安七―三七四刊）（巻一―五東洋文庫、巻六・巻十一―十五大東急記念文庫、巻二―二五京都大学附属図書館、巻二六・二八―三〇大東急記念文庫、巻三七―四〇京都大学附属図書館、巻五六―六〇東洋文庫）

『大方等大集經』日藏經十卷（貞治五―三六六）応安一―三六八刊）（東洋文庫、金沢文庫に巻三零葉）

『同』月藏經』十卷（応安一―三六八）至徳四―三八七刊）（東洋文庫）

『大方等大集經』三十卷（応安七―三七四）至徳三―三八六刊）（立川普濟寺―旧安田文庫蔵）

『摩訶般若經』三十卷（嘉慶二―三八八）応永七―四〇〇刊）（東洋文庫）

ほとんどが鎌倉鶴岡八幡宮旧蔵本（後述）で、每半折五行の折帖（二六・九×九・三cm。料紙は黄色楮紙）に仕立てられている。

「五部大藏經」はこの他に、『妙法蓮華經』八巻と『大般涅槃經』四十巻がある。『妙法蓮華經』は春日版（興福寺）など、少なくとも二十版以上は作られているので、それを代用していたのかもしれない。普濟寺版以外のものにも、宋版「大藏經」に似た版式（後述）の『妙法蓮華經』を見たことがない。後者の『大般涅槃經』は普濟寺版こそ所在を聞かないが、他版の同経は諸所に所蔵されている。現存する普濟寺版「五部大藏經」は金沢文

庫所蔵零葉を除くと、全てが上杉憲直奉納鎌倉鶴岡八幡宮旧蔵本（永享五年——四三三）である。同具の憲直奉納『大般涅槃經』は書写本であるので、或いは当時同経の刊本が見つからず、書写本で補完したものかもしれない。現存していないといっても、出版されなかつたとはいえない。奉納する際に、『大般涅槃經』だけは揃えられなかつたことも考えられる。刊本はいずれも中国宋時代出版された「大蔵經」を版下にして作られた、いわゆる覆宋版に属するものである。そういうわけで、宋版に似た南北朝時代の刊経があると、「普濟寺版」といつてしまつ場合が多い。国立国会図書館所蔵『華嚴經』卷五や慶應義塾図書館所蔵『華嚴經』卷二八・『大方等大集經』卷十六・二九は、以前、版式が類似していることから、普濟寺版といわれていたことがあつた。これらは、ほぼ同じ頃に出版されたものと思われるが、全く別版の経巻である。

こうした覆宋版の「五部大乘經」は鎌倉時代から刊行されている。調査したもので最古のものは、金沢文庫所蔵の鎌倉中期刊本である。別に写経体刊本の相州靈山寺版（同寺は日向薬師？）も所蔵しているが、本稿ではその詳細を省略した。「五部大乘經」は鎮護国家の經典であるので、随分需要があつたようだ。『吾妻鑑』（正治二年——二〇〇—正月八日）に、「摺写五部大乘經」と記されている。「摺写」は刊行・印刷のことであるので、鎌倉時代初期からあつたことがわかる。これだけでは全く版式はわからない。鎌倉時代から室町時代まで度々刊行されているが、ほとんど全部が宋版「大蔵經」の覆刻であるので、版式・字様を同じくして、非常によく似ている。これらの古刊経と宋版「大蔵經」を比較調査した結果、一組であるのに、いずれも『華嚴經』、『大方等大乗經』（日蔵・月蔵共）、『摩訶般若經』の三経は南宋思溪版「大蔵經」、『大般涅槃經』は北宋東禪寺版「大蔵經」所収本の各覆刻であることがわかつた。全て底本の組み合わせが一致しているので、各版は宋版を各々直接覆刻したので

はなく、先行する和刻の覆本版「五部大乘経」を底本にして、刊行したことがわかる。従って、新たに普濟寺版『大般涅槃経』が発見されるとすれば、その本もまた、他の「五部大乘経」所収経同様に、北宋東禪寺版「大蔵経」の覆刻であることが推測できる。

「五部大乘経」の内、『大方等大乘経』の最終巻四十末に、版木を普濟寺に留める旨を記した刊記があるので、これらの経巻を「普濟寺版」といつ。刊記は

「此経印板今世幾希也仍發心ノ募衆而刊行之憑茲善利法界ノ衆生同円種智ノ至徳丙寅臘月 日 化主光信謹識ノ版留武州立川県玄武山普濟禪寺」。

この刊記を見ると、光信（前述）が資金を勸進募金して、出来上がった版木を普濟寺に保管したということがわかる。版木の所蔵という意味で、従来から「普濟寺版」の名称で知られている。この刊記や助縁者刻記によつて、武州御岳山別当世尊寺の歴代住職四人が、出版資金を勸進募金して歩いたことがわかる。ただし、これだけでは、普濟寺の発願によつて出版を始めたか否かはわからない。出版資金の勸進という側面から見ると、立川普濟寺版と並んで、「武州御岳山版」という名称でもよいように思われる。或いは普濟寺が出版事業を始めるに当り、資金の調達については、勸進活動に慣れている御岳山に依頼したということも考えられる。しかしながら、現存する史料だけでは詳細はわからない。普濟寺版に記された刊記や刻記の詳細は、拙稿「現存立川普濟寺版について」（『書誌学』復刊一八号）をご覧いただきたい。

普濟寺は臨濟宗建長寺派の寺院で、同寺所在地の「立川市柴崎」付近を根拠地にした立川氏（日奉氏の一流）

の寺院といわれている。開山は古林会下の物外可什、南北朝・室町時代は多摩地方の文化の中心地であったように考えられている。後述のように助縁者の中には、芝崎・福島を姓氏にする立川付近の有力者と思われる人達も多い。

## 二、普濟寺版刊行の助縁者と刻工

いささか繁雑になるが、左記のように普濟寺版の柱(版心)や行間に刻された地名或いは人名・寺名を、五十音順に配してみた。これらの名が同一巻に再度書かれている場合は、特別な記述を除き省略した。その下に、現在の比定地・収録巻の刊行年月(年記のあるもののみ)・( )内に収録巻数や、その他の注を記した。

秋留二四六人 現あきる野市(華蔵六)

安東尾張入道浄住 安東氏(姓氏) 応安四・五・二三(月蔵五)

板倉掃部助聖聰 板倉氏(姓氏) 応安五・三(月蔵十)

伊藤女光運 伊藤氏(姓氏) 応安一(日蔵十)

伊名村住子金井信女紫金 あきる野市(旧五日市) 伊奈(山田の西) 応安七・二(華蔵五八)

伊名村住子金井女紫金 同(大集二)

「伊名村住」女紫金為父子金井 同 応安一・六(日蔵九)

伊名村住信女子金井紫金 同(月蔵七)

伊名村住沙弥禅戒 同(大集二)

伊名村沙弥道光 同(大集二)

伊名村住沙弥能阿 同 応安七・二(華嚴五八)

伊名村住沙弥能阿 同(大集二)

伊名村住清信士能阿 同 応安一・六(日蔵九)

伊名村住沙弥能阿 同(月蔵七)

沙弥能阿為考阿母嬢阿 同(月蔵七)

伊名村無名衆二〇〇人 同(大集三)

入間河住女了円 小五郎 心阿 現狭山市(入間河) 応安五・三(月蔵十)

惠雲寄住比丘尼了意 貞治六・五(日蔵四)

前住円覚大喜和尚 鎌倉円覚寺(華嚴十一)

遠州小野郷衆 浜北市尾野? (豊田郡) 応安四・五・二三(月蔵五 この巻遠州の人々の寄進が多い)

遠州勝田庄衆 静岡県榛原郡榛原町勝田 応安四・五・二三(月蔵五)

遠州金屋村衆 榛原郡金谷町 応安二・十一(月蔵四)

遠州河崎衆 榛原郡榛原町静波(勝間田川左岸) 応安四・五・二三(月蔵五)

「遠州?」久隠衆 久隠 応安二・十一(月蔵四)



遠州坂口郷衆 榛原町坂口 応安四・五・二三（月蔵五）

遠州西島郷衆 志太郡大井川町西島？（現駿河側） 応安四・五・二三（月蔵五）

「遠州？」西輪衆 西輪 応安二・十一（月蔵四）

遠州藤森郷衆 大井川町藤守？（現駿河側） 応安四・五・二三（月蔵五）

遠州妙証住持比丘尼道欽 遠江妙証寺 応安二・十一（月蔵四）

為遠州妙証方山比丘尼道契 遠江妙証寺 応安五・三（月蔵十）

遠州妙証寄住比丘尼興心 遠江妙証寺 応安二・十一（月蔵四）

遠州妙証東堂比丘尼從倫 遠江妙証寺東堂 応安二・十一（月蔵四）

遠州妙証寄住比丘尼真挺 遠江妙証寺 応安二・十一（月蔵四）

遠州吉永郷無名衆 大井川町吉永（現駿河側） 応安四・五・二三（月蔵五）

越生信女宗幸 埼玉県入間郡越生町 貞治六・三（日蔵二）

小山助沙弥道盛 町田市小山町（相模原市と分割）（或いは東久留米市小山） 応安二・四（日蔵八）

小山沙弥道盛為父了祖母妙阿 同 応安一・四（日蔵八）

小山信女了明 同（月蔵二）

長瀬法英為父加賀爪甲斐入道樂阿 加賀爪氏 応安六・四（月蔵六）

嘉元戦亡諸霊 （華蔵二）

嘉元戦亡諸霊（為四方田道氏并） 応安一・九（月蔵一）

茅窪信女宗仙 日の出町茅窪 貞治六・三（日蔵二）

茆凹各人 同（華蔵六）

茆凹寺各人 同所の旧能仁寺？（華蔵六）

唐沢住比丘尼契薫 八王子市長房の内 唐沢（或いは埼玉県越生町上野の内） 貞治六・四（日蔵三）

唐沢住比丘尼契薫 同 応安一・九・十一（月蔵一）

唐沢五郎左衛門入道光阿 同 貞治六・五（日蔵四）

為唐沢禅尼聖唯 同 応安四・五・二三（月蔵五）

唐沢信女唯阿 唐沢 貞治六・五（日蔵四）

河口女如阿 八王子市川口町（華蔵六）

河口衆 同（日蔵五）

金峯參詣衆四二六六人 武州御岳山 貞治三・一（華蔵五）

久米河住秋景 東村山市久米川町 応安二・十（月蔵三）

久米河宿中無名衆廿人 同 応安五・三（月蔵十）

久米河住沙弥淨秀 同 応安二・十（月蔵三）

黒沢十九人 青梅市黒沢（真浄寺近く） 貞治六・四（日蔵三）

阿闍梨慶源 貞治六・五（日蔵五）

元弘戦亡諸霊（華蔵二）

建長寄住比丘至宗 鎌倉建長寺 貞治五・五(日藏一)  
建長寄住比丘從義 同 応安一・三(日藏七)  
高安寄住比丘慶宗 府中市片町高安寺 貞治六・三(日藏二)  
「江州」海津東浜衆(正宗寺領) 滋賀県高島郡マキノ町海津 至徳四・三(月藏八 この巻江州の人々の寄進)  
江州正宗寺住持比丘尼了闇 至徳四・三(月藏八)  
小塩信女聖意 あきる野市五日市の内 旧小庄村(阿伎留神社鳥居前) 貞治六・五(日藏四)  
女小塩聖意為父村田氏家盛法名弥阿 同 応安一・六(日藏九)  
小塩聖意為弥阿 同 応安一・六(日藏九)  
小塩四郎左衛門入道性禪 同 貞治六・五(日藏四)  
小塩各人 同(華藏六)  
小塩衆七〇人 同 貞治六・六(日藏五)  
小丹波住信女祐妙 奥多摩町小丹波 貞治六・十二(日藏六)  
塩田一二五人 日の出町平井の内(華藏六)  
品河衆四七〇人 東京都品川区 貞治二・十(華藏三)  
品河住女妙成 同 応安五・三(月藏十)  
芝崎所屬一九二人 立川市柴崎町(普濟寺の地元) 貞治二・十(華藏三)  
芝崎所屬三四人 同 貞治二・十(華藏三)

芝崎所屬一一九人 同 貞治二・十一（華嚴四）

俗「芝崎」啓初 啓顔 女 宗贊 宗戒 定慧 宗持 同 貞治二・十（華嚴三）

芝崎前伊豆守啓初 同 貞治六・三（日藏二）

為夫芝崎伊豆入道啓初（宗贊） 同（月藏二）

為先夫芝崎伊豆守啓初（信女宗贊） 同 応安二・十（月藏三）

「芝崎」淨慶 同（華嚴二）

芝崎宮内左衛門入道淨慶 同 貞治六・十二（日藏六）

芝崎宮内左衛門入道淨慶 同 応安二・十（月藏三）

芝崎宮内左衛門入道淨慶（為先室宗温） 同 応安二・十（月藏三）

芝崎宮内左衛門入道淨慶（為息男信濃入道啓顔） 同 応安二・十（月藏三）

「芝崎」啓顔 同 貞治二・十（華嚴三）

芝崎信濃入道啓顔 同 応安一（日藏十）

為弟芝崎信濃入道啓顔（聖斤） 同（月藏二）

芝崎信濃守平氏重能 同 貞治六・三（日藏二）

芝崎信女聖琇 同 応安一（日藏十）

芝崎信女宗温 同 応安七・九（華嚴六〇）

芝崎信女宗繼 同 貞治六・三（日藏二）

「芝崎」宗温為父有弁 同 応安一（日蔵十）  
「芝崎」宗温為母宗覺 同 応安一（日蔵十）  
芝崎信女宗贊 同 貞治六・五（日蔵五）  
松蔭寄住比丘性誕 貞治六・五（日蔵五）  
聖源寺各人（華嚴二）  
前住淨智帰山和尚 鎌倉淨智寺 貞治四・二（華嚴十四）  
白岩各人 青梅市成木の内 白岩（旧小曾木村）（松ノ木峠南麓）（華嚴六）  
塵外庵主比丘尼明行 応安五・三（月蔵十）  
真淨寺各人 青梅市谷野（華嚴十二）  
神沢住庵徒 応安一（日蔵十）  
神沢住庵比丘明宗 応安一（日蔵十）  
住瑞雲庵比丘尼聖斤 あきる野市（旧五日市）山田・瑞雲寺 貞治五・五（日蔵一）  
「瑞雲庵」比丘尼聖斤 同 貞治六・五（日蔵五）  
住瑞雲庵比丘尼聖斤 同 応安一・九・十一（月蔵一）  
瑞雲庵比丘尼聖斤為母宗温 同（月蔵二）  
為瑞雲庵喜溪聖忻 同 応安五・三（月蔵十）  
瑞雲寄住比丘尼聖雲 同（月蔵二）

瑞雲寄住比丘尼聖端 同（月藏二）  
 瑞雲寄住比丘尼聖中 同 貞治六・四（日藏三）  
 瑞雲寄住比丘尼聖中 同（月藏二）  
 瑞雲寄住比丘尼宗安 同 貞治六・四（日藏三）  
 瑞雲寄住比丘尼宗建 同 貞治六・四（日藏三）  
 瑞雲寄住比丘尼宗光 同 貞治六・四（日藏三）  
 瑞雲寄住比丘尼理定 同 貞治六・三（日藏二）  
 瑞雲寄住比丘尼理定 同 貞治六・六（日藏五）  
 瑞雲寄住比丘尼理定 同 応安一・九・十一（月藏一）  
 瑞雲寄住比丘尼了普 同 貞治六・四（日藏三）  
 瑞雲寄住比丘尼了普 同 応安一・九・十一（月藏一）  
 瑞雲庵行尼 好音 能詮 知心 本智 本才 本心 智円（月藏二）  
 瑞雲屬無名四八人 同（月藏二）  
 住清泉比丘尼聖証 貞治六・四（日藏三）  
 住総持比丘尼光固 貞治五・五（日藏一）  
 住総持庵比丘尼光固 応安一・九・十一（月藏一）  
 総持寄住比丘尼心愛 応安一・九・十一（月藏一）

總持寄沙弥尼光泉 貞治五・五（日藏一）  
總持寄比丘尼心慶 貞治五・五（日藏一）  
志為大鑑和尚三十三年忌 応安七・二（華嚴五八）  
大鑑先師 応安四・五・二三（月藏五）  
高尾各人 あきる野市（旧五日市）高尾（華嚴二）  
高木次郎左衛門入道光阿 東大和市高木？ 貞治六・十二（日藏六）  
立河住女聖嘯為父聖考母聖妣 立川市 貞治六・五（日藏五）  
「立河住女」聖嘯為父聖考母聖妣 同 応安六・四（月藏六）  
為丹波式部大夫人道演智（女昌寿） 奥多摩町丹波（大丹波 小丹波）（日藏十）  
知足「律」寺無名四人 鎌倉知足律寺（廃寺）？ 応安一・三（日藏七）  
知足律寺寄住比丘尼印照為長淵女惠雲 同 応安一・六（日藏九）  
長寿寄從比丘心中 鎌倉長寿寺？ 応安一・三（日藏七）  
土淵 男道円 日野市内（旧土淵郷）（華嚴六）  
住天照比丘尼了一 同 貞治六・五（日藏四）  
住天照比丘尼了一 応安一・三（日藏七）  
住天照庵比丘尼了一 応安一・九・十一（月藏一）  
為道夏庵主（瑞雲）（日藏十）

為登真院殿尼完海 応安五・三(月蔵十)

為豊田与二入道良阿(昌寿) 日野市豊田? 応安一(日蔵十)

直竹信男文山 埼玉県飯能市直竹 応安一・三(日蔵七)

長井兵庫入道高阿 片倉城の長井広秀の縁者? 応安一・四(日蔵八)(地名ではなく姓氏の長井氏?)

長井掃部助高信 同 応安一・四(日蔵八)

長井女妙忍 日の出町大久野長井 応安一・四(日蔵八)

長井無名 同 応安一・四(日蔵八)

長井無名衆五人 同 応安一・四(日蔵八)

長瀬信女法英 為加賀爪甲斐入道楽阿并母法言 毛呂山町長瀬? 応安六・四(月蔵六)

長房衆 八王子市長房 貞治六・五(日蔵五)

長淵女惠雲 青梅市長淵 応安一・六(日蔵九)

長淵居住沙弥戒阿 同 応安二・十(月蔵三)

長淵郷沙弥泉阿 同 応安二・十(月蔵三)

住南陽比丘自通 応安一・三(日蔵七)

羽部各人 日の出町大久野の内 羽生(御岳道)(華蔵六)

日向各人 多摩は山岳や丘陵が多い地形であるため、南向きの地を「日向」、北向きの地を「日影」と呼んでいることが多い。鎌倉道に沿う、青梅市日向和田という方もいるが、「日向」だけでは現在地を比定することができな



い。(華嚴十二)

日野原一八七人 檜原村(華嚴六)

平井住大和坊初官 日の出町平井(刻工) 応安一・六(日藏九)

福島所属各人 昭島市福島町(華嚴六)

福島女宗倫 同 応安一・六(日藏九)

「福島」禅尼宗心為先夫福島遠江入道宗英 同(月藏二)

「福島」禅尼宗心為子息宗晟喝食 同(月藏二)

「福島」禅尼宗心為母宗温 同(月藏二)

普濟寺衆 立川普濟寺 貞治二・十(華嚴三)

為母藤「原」民部從能 応安一・九・十一(月藏一)

為藤「原」民部禅尼從能 応安五・三(月藏十)

布田衆三九人 調布市 貞治三・一(華嚴五)

步摩庵主比丘昌寿 応安六・四(月藏六)

步摩寄住比丘清忻 貞治六・四(日藏三)

三田宮内小輔平重経 青梅市東方の勝沼城主の三田氏? 応安二・十(月藏三)

御岳正心 青梅市御岳山内(華嚴十二)

「御岳」山内三人 同(華嚴十二)

「御岳山世尊寺」比丘祖栄 青梅市御岳山 貞治六・十二（日蔵六）（祖栄は普濟寺版願主の一人で、御岳山別当世尊寺第四代）

「御岳山世尊寺」為茂林祖栄上人 同 応安五・三（月蔵十）

「御岳山世尊寺」比丘如見 為四方田道氏貞綱法名正綱捨之 同 応安五・三（月蔵十）（如見は普濟寺版願主の一人で、御岳山別当世尊寺第六代）

村山住七郎太郎 村山は、瑞穂町・東村山市・武蔵村山市にまたがる、広範囲な地域 応安一・四（日蔵八）

宅部美作入道貞阿 東大和市狭山の内 宅部 応安一・四（日蔵八）

宅部住比丘尼理生 同 応安一・四（日蔵八）

矢部彦次郎（左衛門尉） 町田市矢部町（相模原市上矢部に分割） 貞治五・五（日蔵一）

山田所属各人 あきる野市（旧五日市）山田 貞治二・十（華蔵三）

山田住女慶音 同 貞治六・四（日蔵三）

山田住女慶田 同 貞治六・十二（日蔵六）

山田住孫太郎入道道従 同 貞治六・十二（日蔵六）

山田 瑞雲庵（寺）（あきる野市）

刑部阿闍梨祐賢 応安一・四（日蔵八）

由木無名衆 青梅市柚木或いは八王子市内由木 応安一・四（日蔵八）

陽沢衆廿八人 あきる野市養沢 貞治六・十二（日蔵六）

陽沢無名衆十三人 同 応安一・三（日蔵七）

横河衆 八王子市内横川町 貞治六・四（日蔵三）

横山衆 当時の横山庄は、現八王子の地の旧称と思われる。 貞治六・四（日蔵三）

横山衆 同 貞治六・五（日蔵五）

横山衆無名 同 貞治六・五（日蔵五）

横山無名 同 応安一・四（日蔵八）

四木各人 町田市三輪町の内 四ツ木？（華蔵六）

四木女愛阿 同 応安一・三（日蔵七）

「四方田」比丘如見 為四方田道氏貞綱法名正綱捨之 同 応安五・三（如見は普濟寺版願主の一人で、御岳山

別当世尊寺第六代。児玉党四方田氏は四方田村（現埼玉県本庄市内）の出身といわれるが、ここでは姓氏と考え

たい）（月蔵十）

為四方田七郎左衛門尉道氏為綱并嘉元戦亡諸霊 同 応安一・九・十一（これも如見の寄進と思われる）（月蔵一）

力石各人 八王子市上恩方町の内 貞治四・二（華蔵十四）

阿闍梨隆海 貞治六・五（日蔵五）

渡野部三郎太郎入道仙阿 貞治六・五（日蔵五）

以上が、地名・寺名・姓氏の付された人名である。これは全体のごく一部で、記された男女は、ほとんどが法名だけしか記されていない。法名二字だけでは、同一人物か否かを判断することが不可能なので省略した。調査

した各経に記された助縁者数を数えてみると、『華嚴経』は六千五百人以上、『大方等大集経』は三百五十人以上、『大方等大集経』日藏経』は四百三十人以上、『大方等大集経』月藏経』は三百二十人以上、『摩訶般若経』は十三人、合計七千五百人以上になる。「無名衆」のような記述も多いので、実際にはのべ八千人以上の人々が、経典の出版のために寄附（結縁）していたものと思われる。地名のわかる人々を中心に、法名だけの人々は特別な場合のみ記した。

普濟寺版の本文行間には、刻工（彫工）の名前が、「工師賢祐彫之」のように記されている。永仙・景村・戒阿・賢祐・三郎・式部浄秀・秋影（秋景と同じ？）・十円・初官・泉阿・宗吉・大夫・智興・知性・朝尊・二木源盛（大輔）・本阿・祐賢の名がみられる。この内、五人は助縁者としても柱（版心）に名が記されている。当時の地方に、版木を専門とする彫工がいたとは思われないが、各経を見ると確りとした版式で彫られていることがわかる。これらは素人にできる仕事ではない。彼らは皆、法名で書かれているが、仏像や細工物を作る職人であるように思われる。戒阿は「長淵郷居住沙弥戒阿助之」（『月藏経』巻三 応安三刊）、秋景は「久米河住秋景捨之」（『月藏経』巻三 応安三刊）、浄秀は「久米河居住浄秀助之」（『沙弥浄秀回向法界』）、『月藏経』巻三 応安二刊）、初官は「平井大和房初官為父道通」（『日藏経』巻九 応安一刊）、泉阿は「長淵郷居住沙弥泉阿捨之」（『沙弥泉阿回向法界』）、『月藏経』巻三 応安三刊）のように刻記がある。或いは『大方等大集経』巻三に見える「宗吉」も、刻工の宗吉であるかもしれない。彼らの居住地が、長淵（青梅市長淵）・久米河（東村山市内）・平井（日の出町平井）であるところよりみると、立川普濟寺や御岳山の配下ではないようにも思われる。

### 三、地域名を付した無名の人々

個人の名が書かれておらず、地域ごとにまとめられた助縁者も随分いる。その中でも、百人以上の衆は、「金峯参詣衆四千二百六十六人(貞治三刊)」、「品河衆四百七十人(貞治一刊)」、「秋留二百四十六人」、「伊名村無名衆二百人」、「芝崎所属一百九十二人(貞治二刊)」、「芝崎所属一百十九人(貞治二刊)」、「日野原百八十七人」、「塩田百二十五人」と、全部で八件記されている。この内、最多の金峯参詣衆は吉野の金峯山ではなく、武州御岳山と思われる。この御岳山は、大和の金峯山から蔵王権現を勧請していたので、金峯山とも呼ばれていた。ここを武州御岳山とすれば、当時から随分信仰の厚い山であったことがわかる。『華嚴經』卷十二には「御岳正心」、「山内三人」も見られるので、刊行者でもある社僧世尊寺歴代の他にも、御岳山内に住んでいた人々の寄進があったことが確認できる。

品河衆は現在の品川(品川区)と思われる。品川は内陸と湾を結ぶ港町で、中世には府中から品川に向かう品川道もあった。多摩川の河口にも近い、江戸湾奥地との有力な物資交易地であった。四百七十人という人数からみて、太平洋岸から関東平野への入口として、栄えていたことが推測できる。

秋留は五日市(あきる野市)付近と思われる。『延喜式』にも収載される、阿伎留神社の鎮座するところと考えたい。当時、秋留野の地域は現在の秋留とは違って、より西方まで広がっていたようだ。町名のもととなる、五日に市の立つ五日市が行なわれるのは、室町時代末からといわれている。二四六人という数を見ると、こうし

た市の立つ以前から集落ができていたことがわかる。別の刻記に「小塩衆七十人」もある。小塩は阿伎留神社鳥居前に広がる小庄と思われる。伊奈や山田はことは別に記しているので、秋留という地名は、あきる野市東方の旧東西の秋留村ではなく、旧五日市一帯のことと考えた方がよいかもしいれない。

伊名村は現在のある野市伊奈である。五日市の東方に位置しており、中世には檜原村などの山村と、東方の平野部とを結ぶ交易地として、大きな市の立つ町であった。江戸時代以降は、似たような立地条件でもある、西方の五日市にすっかり庄倒されてしまったといわれている。五日市街道も以前は伊奈道と呼ばれていた。

芝崎（柴崎）は普濟寺の所在地である。膨大な数にのぼる助縁者の中でも、この柴崎氏や姻戚関係ある福島氏（現在の昭島市内）は有力者に見える。彼らが、いわゆる立川氏であるかもしれない。これらの刻記をみると、彼らだけで何巻分をも寄進していることがわかる（詳細は後述）。刻記を比較していくと、彼らの簡単な系図もできそうである。普濟寺版各経で、度々この姓氏が見られる。

日野原は五日市の西方に位置する、現在の檜原村（後述）と思われる。村内東方の南秋川と北秋川の合流地に、檜原の中心地に当る本宿がある。そこから西方、浅間尾根に登る道が中世の甲州道である。地形の様子から、当時もこの辺りに集落があったことが考えられる。

塩田も五日市の近隣で、その北東に位置する、日之出町平井にある。南北に走る鎌倉道（秩父鎌倉道）と、東西に走る御岳道との交差・合流地に近い、交通の要所であった。

#### 四、勸進に協力した有力者

前述の助縁者には、地元の有力者と思われる人たちが随分いる。各巻柱（版心）の刻記からみると、彼らが版木何枚分にも相当する大額を寄進していたことがわかる。この中でも、有力な寄進者として、左の四者を掲げることができる。比較するために、各人の名が刻された張（板）を数えてみた。「五部大乘經」の各経は長短各々異なるが、一卷当り二十張（板）程の長さでできている。それを基準にすると、彼らが寄進した額の割合がわかりそうではあるが、全く助縁刻記のないものも多いので、これだけを計算しても、正確な割合はわからない。それでも目安にはなると思われる。

（一）芝崎氏や福島氏等、普濟寺周辺の人々 全二八張（板）

普濟寺の地元の地名「柴崎」を名乗っている一族である。柱（版心）の助縁者刻記によって、芝崎有弁・妻の宗覚、息子の芝崎宮内左衛門入道浄慶・妻の宗温（繼）、孫の瑞雲庵比丘尼聖斤（啓顔の姉）・芝崎信濃守啓顔（平重能）・姉妹の宗心、同宗心の夫に当る福島遠江入道宗英・二人の間に生まれ、幼くして亡くなったと思われる息子の宗晟、という系譜が見えてくる。この他に芝崎前伊豆守啓初・妻の宗賛もいる。『華嚴經』卷三第三張（板）に「俗啓初 啓顔 女宗賛…」と並んで記され、両者は名前も似ているので、啓顔の兄弟にも思われるが、これらの刻記だけでは関係がわからない。更に、同巻第一張の刻記「女啓仁 同所屬三十四人」の啓仁も一族にみえる。所屬以下は従者のようだ。芝崎を名乗る人たちは、大額を寄附した地元芝崎の有力者たちと思われる。普濟

寺の旦那といわれる立川氏の宗家とも考えたいところでもある。

(二) 山田村(現あきる野市山田)の瑞雲庵(寺)を中心とした人 全三三張(板)

瑞雲庵(現在の瑞雲寺)の尼僧を中心に山田(現あきる野市山田―旧五日市町内―)付近の人々も、出版資金を喜捨してくれた有力な助縁者たちである。ほとんどが同寺の関係者で、助縁者刻記の中には俗人と思われるものも四件程ある。同寺が縁で喜捨したものと思われる。瑞雲寺については、『新編武蔵風土記稿』に開基の喜深忻は、鎌倉公方足利基氏の伯母で、応安四年(一三七一)七月に没したと書かれている。『月蔵経』卷第十三張(応安五年三月刊)の柱に刻された「志為瑞雲喜深聖忻庵主无二平等回向法界」の喜深聖忻にはば間違いない。この時には既に没していることもわかる。『日蔵経』卷一(貞治五年―一三六六―五月刊)に見える「住瑞雲庵比丘尼聖斤」の「聖斤」は、この「聖忻」と同一人物である可能性もある。「聖斤」の名は『日蔵経』卷五(貞治六年五月刊)、『月蔵経』卷一(応安一刊)、『月蔵経』卷一(年記未記載)にも記されている。特に『月蔵経』卷二では四張にまたがり、彼女の刻記がある。「瑞雲庵比丘尼聖斤為母宗心(第五張)」「比丘尼聖斤為母宗温回向法界(第六張)」「比丘尼聖斤為弟芝崎信濃入道啓顔(第七張)」「比丘尼聖斤為弟啓顔回向法界(第八張)」である。もし、同一人物であるなら、庵主の喜深聖忻は芝崎氏の一族ということになる。その他、同庵に寄住する比丘尼の聖雲・聖端・聖中・宗安・宗建・宗光は各々一張(板)、理定は四張(板)、了普は二張(板)を寄進している。彼女の弟子筋に当るものと思われる。いずれにしても、瑞雲庵のこれらの尼僧は、芝崎氏の縁で喜捨したものと考えられる。その他、同庵の縁者では行尼の、好音・能詮・知心・本智・本才・本心・智円の名も見え、無名四十八人という記載もある。



(三) 伊名村(現あきる野市伊奈)の人々 全二八張(板)

伊名村(現あきる野市伊奈―旧五日市町内―)の子金井紫金や能阿も度々助縁者名に記される人々である。紫金は父の子金井宗源、母の妙蓮のため、能阿は父の考阿、母の嬢阿のために喜捨している。能阿は別に「伊名村住清信土能阿」という刻記があるので、在家信者(優婆塞)であることがわかる。紫金の寄進した分は十張(板)、能阿は八張(板)を数えることができる。他に道光の二張(板)、禅戒の一張(板)、更に「伊名村無名衆二百人」という刻記もある。子金井紫金・宗源や能阿がいかなる人が、全くわからない。

(四) 長瀬信女法英(現毛呂山町長瀬?) 十二張(板)

『月蔵経』巻六の第一張から十二張(板)まで、法英が父親の加賀爪甲斐入道楽阿と母の法言のために喜捨している。長瀬は毛呂山町長瀬とも思われるが、よくわからない。加賀爪氏は江戸時代、幕臣にもいるが、もとは遠江袋井付近の出身といわれている。この巻の第十五張(板)には、立川に住まう聖哺の刻記があるので、「加賀爪」は地名ではなく、姓氏名と思われる。普濟寺版出版の時には、遠州ではなく、東国の住人と考えている。

(五) 遠江の人々

『月蔵経』巻四(応安二刊)はほぼ全巻、遠州妙証寺住持比丘尼道欽、同東堂比丘尼從倫、比丘尼道契など尼僧たちの喜捨によるものである。妙証寺についてはわからない。現在はない寺院のようだ。ただ第十一張(板)柱刻記を見ると、「比丘尼妙法并為父母 見宗 遠州金屋村衆」と、最後に金屋(現金谷町)の無名の人々が書かれている。巻五(応安四刊)の内、全十五張(板)に柱刻記があるが、遠州の人々の書かれているものは全五張を数えることができる。その中には、勝田庄衆(静岡県榛原郡榛原町勝田)・坂口郷衆(同榛原町坂口)・吉永郷

(志太郡大井川町吉永―現在は駿河側―) 無名衆・小野郷衆(浜北市尾野?)・藤森郷(大井川町藤森―現在は駿河側―) 衆・西島郷衆(大井川町西島―現在は駿河側―)・河崎(榛原町静波―勝間田川左岸―) 衆・久隠衆(現在地不詳)・西輪衆(現在地不詳)が記されている。また巻第十十張にも、道契の刻記「志為遠州妙証開山方山比丘尼道契捨之」がある。遠江と駿河との境界は大井川であるが、流路の変わる荒川なので、中世までは随分国境が変更されてきたといわれている。

(六) 近江の人々

『月蔵経』巻八(至徳四―一三八七―刊)には近江正宗寺住持比丘尼了闇と比丘尼心暁(第一張)と同寺領海津東衆(第二張)の刻記がある。この他に刻記ある柱(版心)がないところから、この巻はこの江州の人々によってできたことが想像できる。海津は現滋賀県高島郡マキノ町で、琵琶湖北岸に位置し、水運の要港であった。日本海の敦賀から陸路で運ばれてきた物資は、ここから船に積替えられ、一路琵琶湖上を、東海道の大津迄運ばれた。御岳山の勸進事業に協力してくれる、富裕な商人がいたことも想像できる。正宗寺についてはわからない。

御岳山世尊寺の僧たちは、遠路遠江や近江まで勸進にまわったことがわかる。この両地で喜捨された浄財は、『月蔵経』刊行に使われたと考えてよいかもしれない。これらの巻末刊記を見ると、巻四・五の願主は光信・如見・光用の三人、巻八は光信一人のみが書かれている。この三人の中に、遠江や近江の関係者がいたことも考えられるが、有縁の理由は後世の人にはなかなかわからない。

## 五、助縁者の住所と旧街道の関係

前述の助縁者に付けられた地名をつないでみると、当時の多摩地方の街道筋が大まかに浮かび上がってくる。御岳山の頂上から、別当世尊寺の僧たちが「五部大乘経」刊行の資金を集めるべく、勧進に出かけていたことも考えてみたい。

### (一) 御岳山より下山道

御岳山頂上（九二九メートル）から下山する主要道は、北方に向かう青梅江戸道と、東方に向かう大久野鎌倉道の二道がある。中世にも、ほぼ似たようなコースがあったと思われる。前者は江戸時代、一般信者の参詣道で、下山後は多摩川に沿って東行し、江戸方面に向かった。当時奥多摩地方の多摩川沿いの道は、甲州への主要道ではなかったため、この道は江戸時代ほど重要ではなかったといわれている。

普濟寺版の助縁者に付された地名を見ると、青梅街道西方の小丹波（奥多摩町小丹波）・丹波（同小丹波が大丹波）がある。軍畑の多摩川対岸、柚木（青梅市柚木）で秩父方面から来る鎌倉道（秩父鎌倉道）と交差・合流する。本稿では、少しの間、二つの道が一緒になり、その後分かれる場合に「交差・合流」を使用して、単なる「交差」と「合流」を区別した。

頂上から東方に下るコースは日之出山頂（九〇二メートル）を通り、大久野（現日之出町）に下る。この道は平井川沿いに松尾・肝要・岩井・茅窪（茆凹）・塩田・平井に行くが、途中、茅窪から鎌倉道（秩父鎌倉道）と交

差・合流し、そのまま塩田まで進み、ここで鎌倉道は別れ南進する。この辺りでは、御岳山頂に向かう道であるので、「御岳道」とも呼ばれていた。

普濟寺版には、西から羽生（日之出町大久野の内）・茅窪（同町茅窪）・塩田（同町平井の内）・平井（日之出町平井）（刻工の一人初官の居住地）の地名が記されている。途中、日之出山頂から御岳沢・養沢川を下り、五日市に向かう道（次項）もある。

（二）伊奈道（五日市街道）・檜原道

前述のように、当時は伊名（あきる野市伊奈―旧五日市町―）が山間部と平野部をつなぐ交易地として盛んであったようだ。

普濟寺版には秋川北岸を東から、山田（あきる野市山田）・伊名（あきる野市伊奈）・秋留（あきる野市五日市）・小塩（あきる野市五日市 旧小庄村）の地名が書かれている。山田・伊名（奈）・秋留は前述のように大勢の奇進者がいる村々である。伊名（奈）や秋留（五日市）には、当時としては大きな集落があったと考えられる。檜原村はこうした村々の西方に位置している。現在、五日市から西を檜原街道と呼んでいるが、当時も檜原道といっていた。東方から来る甲州道は目と鼻の先の、秋川南岸（伊奈道の対岸）を進む。北岸の小庄（五日市）西方で、両道は合流した。普濟寺版には、「日野原百八十七人」という助縁者刻記がある。日野原は檜原と思われ、中心部の本宿から時坂を登り、浅間尾根に行く道（現在のハイキングコース）が甲州道といわれている（甲州街道の項にて後述）。本宿は武州・甲州、両地からの旅人が往来する、谷口の集落である。この他、陽沢という地名も見え、現在の五日市と本宿の間から分かれ北上する、御岳山登山道筋にある、養沢のことと思われる。日之出山

頂で、(一)の大久野鎌倉道(御岳道)に合流する道である。

(三) 鎌倉道(秩父鎌倉道)

鎌倉街道は幾つもあるが、奥多摩地方を南北に走る道という。本稿では鎌倉道(秩父鎌倉道)として、他の鎌倉街道と区別した。埼玉県の秩父盆地・人間郡名栗村・山伏峠・小沢峠・東京都側の上成木・松の木峠・白岩・榎峠・軍畑、多摩川を渡り柚木で氷川方面からの道と交差・合流して、梅ヶ谷峠(或いは馬引沢峠・玉ノ内)・長井・茅窪・平井本宿・山田、秋川を渡り網代・田守・戸沢・大楽寺・元八王子、浅川を渡り、狭間に向かう。網代で東方から来た甲州道と交差・合流していた。以後は町田街道とほぼ一致している。軍畑から多摩川を渡らず東に行くと、青梅街道(江戸時代)で、青梅を貫け、江戸に向かう。鎌倉道は茅窪で御岳道と交差・合流、次いで山田で伊奈街道(五日市街道)と交差した。

普濟寺版に見える地名は北から南へ、白岩(青梅市成木の内)・黒沢(青梅市黒沢)(この道より東方、真浄寺のそば)、多摩川を渡り南岸の由木(青梅市柚木)・長井(日之出町大久野の内)・茅窪(御岳道と交差地)・塩田(日之出町平井の内)・平井(日之出町平井の内) 平井本宿付近?)・伊奈(あきる野市伊奈)・山田(あきる野市山田)(伊奈道と交差地)、河口(八王子市市川町)・横河(八王子市横川町)・長房(八王子市長房町)・唐沢(八王子市長房町の内?) (越生町にも唐沢という地名がある?)・横山(横山郷は現八王子市中心部、江戸期の八王子宿の地)が並び、鎌倉道とほぼ一致している。途中、横河(横川)から西方に佐野川往還(恩方街道)が別れる。普濟寺版に見える力石(八王子市上恩方町の内)は、その先西方十五キロメートル先にある。

刻記中には、小沢峠の北側登山口小沢東方の直竹(飯能市直竹)も記されている。直竹はこの鎌倉道と、東方

平野部を進む鎌倉道とを連絡する、道筋に当たっている。

(四) 町田街道

前項の鎌倉道から南に続く道で、高尾山東方の狭間・大戸・小山・奥野・木曾・町田・鶴間・瀬谷・藤沢を通り、鎌倉に向かう。

普濟寺版には小山（小山は町田市小山町と相模原市小山に分割）・矢部（矢部は町田市矢部町と相模原市上矢部に分割）・四木（町田市三輪町の内 四木）（街道から少し東方に位置）がある。

(五) 鎌倉街道 上ノ道・下ノ道

鎌倉から武蔵府中を通り、上野・信濃国に向かう道を通常、上ノ道という。鎌倉・鶴間・木曾・関戸・府中・所沢・堀兼・寄居・児玉・高崎を通り、碓氷峠に向かう。下ノ道は弘明寺・丸子を通り、現在の東京湾岸を北上して房総・常陸に向かう。

普濟寺版は上ノ道では、久米河（東村山市久米川町）・村山（瑞穂町・東村山市・武蔵村山市一帯の広範囲）・入間河（狭山市）、長瀬（埼玉県毛呂山町長瀬？）、この他久米河より西方の宅部（東大和市狭山）、少し西側の道に沿う唐沢（埼玉県越生町上野の内）（唐沢は八王子市長房にもある）・越生（同越生町）が記されている。下ノ道では品河（東京都品川区）がでてくる。前述の通り、中世には府中方面から品川道があったように、海上から関東平野西部への連絡口でもあった。

鎌倉街道の目的地でもあり、出発地でもある鎌倉の人々も、刻記に出てくる。禅宗五山、円覚寺の「前住円覚大喜和尚」、建長寺に寄住する比丘至宗・同比丘從義、同浄智寺の「前住浄智帰山和尚」、長寿寄住比丘心中、「知

足律寺寄住比丘尼印照」「知足寺無名四人」である。前者は鎌倉山内の長寿寺、後者は大仏の近くにあったといわれる知足律寺とも思われる。

(六) 甲州道

伊奈道(二)でふれたように、当時の甲州道は府中・谷保・日野・横山・滝山城下・戸吹を通り、網代(あきる野市網代)で鎌倉道(鎌倉秩父道)(三)と交差・合流していた。甲州道は秋川を渡らずに、川の南岸に沿って西進し、鎌倉道は北岸の山田に渡った。甲州道は秋川南岸の高尾・留原・小和田を過ぎ、北岸に渡り伊奈街道(五日市街道)と合流していた。その後、沢戸で再度秋川南岸の戸倉に渡り、檜原村の本宿から時坂を登り、浅間尾根に行き、そこから尾根筋を西進して、風張峠を越え、日指に下り、川野・丹波山・大菩薩峠に向かっていた。

普濟寺版には、東から布田(調布市)・府中高安寺・芝崎(立川市柴崎町)・福島(昭島市福島町)・土淵(日野市)・横山(八王子宿の地)・高尾(あきる野市高尾)・日野原(檜原村)が記されている。江戸時代、普濟寺の地に当る芝(柴)崎には甲州街道の渡し場(日野の渡し)が置かれていたが、中世にはもう少し東寄りの万願寺の渡しが使われていた。芝崎・福島の両地は甲州道より少しだけ西にはずれているようだが、甲州道筋といつてよいだろう。

(七) 青梅街道

新宿から青梅方面に向かう青梅街道は、奥多摩と江戸を結ぶ主要道である。江戸城の漆喰壁に使う、青梅成木の石灰を運ぶために開かれた道であるので、普濟寺版の時代には未だ整備されていなかったという。関東平野をほぼ南北に、何種類もの鎌倉街道が走っていた。これらを東西に結ぶ道も中世から作られていた。青梅方面から、

多摩川北岸や南岸を通り東西に走る道、箱根ヶ崎（瑞穂町）を通り前掲鎌倉街道上ノ道につながる道もあった。普濟寺版の助縁者中に、「三田宮内小輔平重経」がいるが、平を名乗っているので、当時青梅一帯の領主であった、東青梅勝沼城主三田家の一族と思われる。二百年後の永禄六年（一五六三）、三田家は綱秀の代に北条家に滅ぼされた。多摩川南岸の地名では、長淵（青梅市長淵）が見える。当時の長淵は、近世より広い地域の総称で、東隣の羽村方面まで含まれていた。

## 六、おわりに

以上の通り、普濟寺版に記された地名が、概ね当時の街道に沿っていることがわかる。普濟寺版『五部大乘経』の出版資金を集めるために、御岳山の別当世尊寺四世の祖栄（〜貞治三・七・二一）・六世の如見（〜応安三・五・七）・七世の光用（〜至徳三・十二・二）・八世の光信（〜応永七・三・二八）が、近くは多摩地方や飯能・越生方面、遠くは遠江や近江まで廻り勸進活動を行っていた。前述のように、出版費用は大よそ五千貫文（米にして五千石）程必要であったと考えられる。普濟寺版の助縁者刻記を精査すると、地方の有力者だけでなく、庶民からも寄進を受けていたこともわかる。現存する最古の『華嚴経』巻一に、「貞治二年八月六日始之」と記されるように、貞治二年（一一三三）に刊行が始まり、『摩訶般若経』巻十の応永七年（一四〇〇）（当経願主の光信が同年に没しているせい）か、以後の巻には年記がない）以降まで、約七十年にわたり、出版事業が行なわれてきた。現在のところ、『大般涅槃経』全四十巻と『妙法蓮華経』八巻の所在がわからない。同種の覆宋版「五部大乘経」



の何れの版にも『妙法蓮華經』はないので、普濟寺版にもなかったと考えてよさそうである。しかしながら、『大般涅槃經』は他版では揃っている。この二經だけで、刻工への代金が一千貫文程かかるころをみると、出版費用が集まらなかったことも考えられる。

(参考文献)

五日市の古道と地名 並木米一著 五日市町教育委員会 昭和五九

五日市町史 同町 昭和五一

定本市史青梅 同市 昭和四一

新編武蔵国風土記稿 間宮土信等編 内務省地理局 明治十七

多摩の街道 上・下 清水克悦等著 けやき出版 平成十一

日の出町市 通史編中巻 同町 平成十四

武州御岳山史の研究 斎藤典男著 隣人社 昭和四五(日本史研究叢書五)

「現存立川普濟寺版について」拙稿 『書誌学』 新十八号 昭和四五年二月 五〜三五ページ

「現存普濟寺版について(追録)」書誌学 新十九号 昭和四五年五月 二五〜三〇ページ